

第三節 「鞭声粛々廊下を渡る」

放送室から職員室の前にやって来たマリ、上田、石田の3人。上田は、マリと石田に待機するように手で合図し、職員室の扉をしゃがみこんだ姿勢のまま、慎重に少しだけ開けた。そして、中の様子を確かめると、マリと石田に「誰もいないようだ……」と小声で伝えた。

3人は音を立てないように注意しながら職員室に忍び込んだ。職員室の窓からはグラウンドに侵入してきた変異者たちが、興奮した獣のように徘徊しているのが見える。

「い、急ごう……」

そう言って石田は、緊張した面持ちを崩すことなく、低い姿勢を保ったまま、ケータイ電話が保管されているロッカー前へと、ふたりを先導した。

「ここだ……」

ロッカー前で止まった石田は、扉の取手に手を掛けた。

「……うかつだった……」

石田は下唇を噛み、取手から力なく手を離した。

「どうした委員長？ 早く開けるよ」

上田はまごついていている石田を脇へやると、ロッカーの扉を開けようと取手を握って力を入れた。ガチャガチャ……ロッカーには鍵が掛けられていた。

「どうして、鍵が掛かってんだ？」

怒りを抑え込みながら、上田は青ざめた石田を睨んだ。石田はその視線を避けるように、上田から顔をそらし、きまり悪そうに答えた。

「い、いつもケータイの籠はここに保管するんだ。まさかその後、鍵を掛けてたなんて……。おそらく鍵は、大岡先生が持っている……」

「ふざけんな！ あのバケモノから奪い取れって言うのか？」

語気を強めた上田は、石田の襟を掴んだ。

「仕方ないだろ！」

「しっ！」

とっさにマリが口元に人差し指を当てて、ふたりを静止させた。

その張りつめた表情に、上田は辺りを警戒するようにうかがった。後ろの方でかすかに物音がする。どうやら職員室に隣接する校長室が発信元のようにだ。

石田の襟から手を離れた上田は、傍らに置いたバットを手にして構えた。ゆっくりと校長室に近づいて行く上田を見て、責任を感じた石田もデスクの上にある花瓶を手に取ると、おっかなびっくり後に続いた。

「気をつけて……」

マリがふたりにささやくと、上田がわかったと、右手を挙げて合図をした。

校長室の扉の前に着いた上田は人差し指で耳を貸せというジェスチャーをして、後方の石田を引き寄せた。

「いいか委員長、カウント3で開ける。そしたら俺が突入する。お前はその後に関け」

耳を傾けていた石田は上田の両目をしっかりと見つめ、小さくうなずいた。

ひと呼吸した後、上田がカウントを始めた。

「3、」

それを聞いて石田が校長室の扉を勢いよく開け放った。

「バカッ、違えーッ、うおおー！」

石田の勘違いを非難している間はない。上田は叫びながらバットを振り上げ、校長室へと突入した。

「だあぁー！」

石田も花瓶を振り挙げ、上田の後を追って校長室へ突入する。

「……………」

マリは両手を胸に合わせて、ふたりの無事を祈った。しかし、突入してから数十秒経っても何の反応もない。

「上田くん……、石田くん……」

校長室へ向けてささやくように呼びかけるが、返事はない。緊張と恐怖がマリの全身を支配する。

「まさか、ふたりとも……」

マリは勇気を振り絞り、ゆっくりと校長室に近づいた。そして、意を決して恐る恐る中をのぞき込んだ。

「12」

すると、平然とした顔の上田と石田が応接用のテーブルに紙の束を広げ、何かを調べている。

「ちよつと、何してんのふたりとも！ 襲われて死んじゃったと思ったじゃない！」

「ワライ、ワライ」

泣きそうな顔で校長室をのぞき込んだマリに気づいた上田は軽い調子で謝ると、紙の一部を手に取り、マリに掲げて見せた。

「内申書、俺たちの」

上田の言葉にあっけにとられて言葉を失うマリ。

「いや、コイツがお前たちも内申書を書き直したほうがいいぞって言うから」

上田が親指で校長先生の机の方を指すと、見覚えのある坊主頭の男子生徒が校長のイスに座ってふんぞり返っていた。

「オッス！」

そこには、朝から教室に姿を見せなかった前田ケンジがいるではないか。

「ま、ま、前田く〜ん！！」

あらまつ、という驚きのジェスチャーでマリは前田の名を呼んだ。

「遠山、元気だったか？」

ここまでの前田の話をしよう。

前田は正門で遅刻をとがめられた後、そのまま大岡先生に生徒指導室へ連れて行かれ、しこたま説教を受けた。疲れ切った前田は授業を回避するために、仮病を装って保健室に直行。1時間目の授業が終わる前には教室に顔を出すつもりが、そのまま熟睡。昼頃に起きて、食堂で昼食を食べ、また保健室に戻って来て少し休憩するつもりが、またそのまま眠ってしまった。

しばらくして目を覚ましたものの、保健室にも職員室にも先生の姿が見えなかったので、人生最大のチャンスとポジティブに考え、校長室に忍び込んで、出席日数の足りない内申書を書き直そうとしたわけだった。

マリは思わず「はあ……」とため息をついた。しかもよく考えれば、クラス委員長の石田まで自分の内申書を盗み見している。

「ちよっと、石田くんまで！」

「いや、俺の場合は一応確認したまでだよ……。こいつらとは違うんだよ」

「中吉のヤツ、相変わらずセコイことを言いやがる」と言い逃れを図る石田を前田が追い込む。「やめろよ、その呼び方あ」

そう石田が抗議した時、上田がマリの顔の前に内申書を突き出した。

「ホレ、お前のもあるぞ」

目の前に差し出されれば、やはり内容が気になるマリ。上田から手渡された自分の内申書を受け取ると、こっそりのぞき見た。担任の一言欄には、『クラス内ではこれといって目立つ存在ではなく、生活態度は至って真面目な努力型。ただ、歴史の偏差値が他の教科と比べて異常に高いところに、彼女の非凡な能力を感じる』と書かれていた。

「ハハハ……」

気が抜けたようにマリは苦笑した。

「お前の、何て書いてあんだ？」

「見せる訳ないでしょ！ バカ！」

内申書をのぞき込もうと顔を寄せた上田に、マリは背を向けた。窓の外を変異者となった校長先生がゆらゆらと通り過ぎて行った。

「それより、今はこんな事している場合じゃないでしょ！ 一刻も早く八幡城に向かわなきゃ！」マリは何とかして修正を企てる3人に注意すると、内申書をもとにあった場所に戻した。

前田を加えて4人となったマリたちは体育館には寄らず、食堂脇から校舎外に出て、直接登山道へ向かうことにした。

途中、廊下で何人もの生徒たちが血だまりの中で倒れているのを目撃しつつ、4人は食堂へと近づいていた。そこで窓一つ隔てて、包丁を持ってウロウロする変わり果てた学食のおばちゃんのを確認した。

「はあ、とでも、ぎぶんが、いいなあ」

食道の床には、血だらけで倒れている他のおばちゃん達の遺体が無造作に転がっている。発見されまいと、窓の下に隠れるように、上田、マリ、石田、前田の順で、中腰のまま食堂脇の廊下の通過を試みる。

「あえッ！」

4人は姿勢を低くしたものの、大き過ぎる体を曲げ切れない前田の背中だけが、ひよこひよこ通りすぎて行くのに、変異体のおばちゃんが気づいた。

「きええええ！」

奇声を発したおばちゃんは、手にした包丁を振りかざし、前田の背中めがけて飛びかかった。しかし、言うまでもなく、食堂と廊下の間にはガラス窓がある。

「パリン！」

おばちゃんの体がガラスに衝突し、窓ガラスが派手に飛び散った。

「うおおおおおおお！」

突然割れた窓ガラスの音に、動転した前田が飛び上がり、その拍子に前田の後頭部がおばちゃ

んの顎をアッパーカットのごとく強烈に突き上げた。

「痛てええ！」

おばちゃんから奇襲されたとも知らず、前田は頭に受けた衝撃を確認するように後頭部を撫でた。

「何やってんのっ?」

「な、何でもねえ」

驚いて振り返った石田に、首を左右に曲げてゴキゴキ骨を鳴らした前田は、今のは何だったんだ? という顔をして辺りを見回した。

調理室の床には変異体のおばちゃんが倒れて痙攣していた。

「今の音で大勢集まって来る。走るぞ！」

最前列の上田が体を起こして手招きをすると、マリ、石田、前田は一気に廊下を駆け抜けた。

体育館裏の登山道までたどり着くことができた4人は、虎伏山の山頂付近を仰ぎ見た。

「みんな、無事に避難できてたらいいんだけど……」

「よっしゃ、じゃ行くか！」

今度は前田を先頭に、八幡城目指して登山道を登り始めた。最後尾にはバットを持った上田がつき、後方に注意を払う。

「しかしこんな道、よく知ってたな？」

先頭を歩く前田がすぐ後ろのマリに尋ねた。

「うん、ちよつとね……。郷土の歴史に興味があつて、小学生の時から何度かお父さんと、この城を訪れたことがあつたんだ」

「そうなんだ」後方を気にしながらも、マリの話に耳を傾けている上田。

「山城とか呼ばれるこのタイプのお城には、必ず城主が落ちのびるための抜け道がいくつもあるものなのよ。まあ、今私たちが登っているこの登山道の場合は、『麓の城』から本丸の『詰の城』

へ登城するための本来の道なんだけどね」

「そんな場所に俺たちの学校は建てたんだな……」

すらすらと説明するマリの話に感心した石田は、振り返って学校を見下ろした。

「ええ、そうね。学校と反対側にあるアスファルトで舗装された道のほうが、後世になって観光用に作られた新しい道なのよ」

登山道脇には時折、可愛らしい紫色の竜胆の花が、木立の合間からの漏れる日の光に当り、キラキラと輝いていた。

しばらくして4人は頂上の開けたスペースに出た。傍らにある案内板には大手門跡と記されている。マリたちの前方には、小ぶりながらも、4層5階の白く輝く天守閣が威風堂々とそびえ建っていた。

天守閣は石垣の上に建てられており、その周りを白壁がぐるりと囲み、大小2基の櫓、櫓門などが付いている。江戸初期に建てられた望楼型天守だ。

「いつもは気にも留めなかったけど、こうして見るとスゲーな」

上田は、鯨が載った天守閣の屋根を見上げ、感嘆の声を上げた。

「考えてみたら、お城に上がったのって初めてだ……」

石田もまぶしそうな目つきで天守閣を眺めている。

「姫路城みてーだな」

前田にとっては、どの天守閣も播磨の姫路城に見えるのだろう。

「みんなは無事なの？」

天守閣に感心する3人をよそに、マリは周囲に気を配らせた。

4人が今いる場所は本来、三の丸と呼ばれる郭。その先に段々畑のように二の丸、本丸へと各層の郭が連なっている。天守閣はその本丸にあり、戦時の際には城主の指揮所としての機能がある。

しかし本丸からは何の気配もなく、辺りはただ静まり返っていた。

「助かったのって、私たちだけなの……？」

「放送、聞こえてなかったんじゃない……」

最悪の可能性を口にする石田と、いよいよ泣き出しそうな顔のマリ。

「とにかく、あの一番でかい建物の所まで行ってみようや」

前田は天守閣を指差した。

4人は周囲を警戒しながら、石垣沿いを本丸目指して進み始めた。

石垣の上に建てられた「隅櫓の窓」「石落とし」「高塀の白壁に開いた「矢間」と呼ばれる射撃用の無数の穴が不気味に侵入者を威圧する。

さらに、曲がりくねった石段を上っていくと、本丸門前の短い石段にたどり着いた。しかし、その先に見える本丸郭へ入るための門、本丸門は固く閉ざされていた。

「誰かいませんかー？」

本丸門に向かって呼びかけるマリ。すると、しばらくして本丸門が自動的にギギと音を立て、ゆっくりと開き始めた。とっさに身構えるマリ、上田、石田、前田の4人。

「あっ！」

しかし、開いた門からは一斉にマリのクラスメイトたちが飛び出してきた。

「マリちゃん！」

「遠山さん！」

口ぐちに名前を呼びながら駆けて来た女子生徒たちが、マリを囲んで強く抱きしめた。

「みんな、無事だったのね！」

マリは涙ながらに喜び、クラスメイトたちと再会の抱擁を交わした。

「心配したじゃない！」

「俺の活躍、見せてやりたかったよ！」

いつになくしおらしいヒデミを前に、石田は調子よくバットで素振りするフリをして見せた。

「前田先輩イイ！」

体操着の1年柔道部員たちが、前田の元に駆け寄って来る。

「生きてたんすか、前田さん？」

「てか、学校来てたんすかー？」

生死より学校に来ていたことに驚く、いかにも前田の後輩らしい連中の出迎えに、前田も素直に喜びを表した。

上田も同様に、野球部の部員やクラスメイトたちに囲まれていた。

「上田ああ、やっぱ、おめえがいねえと俺たち、調子でねえわ！」

野球部らしく体をド突き合い、髪をくしゃくしゃに撫でまわして喜ぶ上田と部員たち。

「はーい、はいはい！ よーし、よしよし！」  
そんなまわりつく部員や友達を、上田はまるで動物王国の犬を愛でるかのようにあしらいながら喜んだ。

「みんな……」

マリが城を見上げると、城壁上には、マサミや上杉、平賀たちクラスメイトの他にも、たくさん生徒たちが並び立っていて、4人の生還に瞳を潤わせていた。

「シズちゃん」

本丸門の前には、弓を持って微笑むシズカの姿もあった。

しかし、その傍らに元気なく立つサトミの姿にマリは気づいた。

「そっか、明智くん、いないんだ……」

こうして4人は、みんなからの割れんばかりの拍手で迎えられ、無事に入城を果たした。